

黃帝問曰。今大山熱病。死者皆傷寒之類也。

或曰。愈之。或曰。死。此其死。皆六七日之間。以之。

此愈。其死。十日以上。以之。何也。其解。知。

厥。其。故。問。曰。岐伯對曰。曰。人之寒。以。傷。

也。則。病。甚。且。難。矣。其。寒。以。

兩。寒。之。病。死。矣。矣。

帝曰。厥。其。狀。何。也。岐伯曰。傷寒。一。日。以。

巨。陽。之。氣。受。之。巨。陽。是。諸。陽。之。屬。也。其。脈。以。風。行。

連。也。故。以。諸。陽。之。主。氣。也。其。故。以。頭。項。痛。也。

三十一

腰脊強也

二日。以。太陽。之。氣。受。之。陽。明。之。氣。受。之。其。脈。以。胃。

候。也。目。以。睛。也。故。以。身。熱。之。目。赤。也。鼻。乾。也。以。得。之。也。

三日。以。少。陽。之。氣。受。之。少。陽。之。氣。受。之。其。脈。以。肝。

循。也。耳。以。終。也。故。以。胸。脅。痛。也。耳。聾。也。

四日。以。經。絡。皆。受。之。病。受。之。也。未。也。入。之。也。

故。以。之。也。可。也。

五日。以。太。陰。之。氣。受。之。太。陰。之。脈。以。脾。也。故。以。

終。也。故。以。腹。滿。也。也。也。

五日。以。少。陰。之。氣。受。之。少。陰。之。脈。以。腎。也。故。以。肺。也。

舌本に軟ふ如き状には燥す。舌乾きて渴す。

六日に少陰の病者へ。厥陰の脈は陰谷を循り、肝に絡ふ。以て煩滿して囊縮む。

三陰三陽の五藏六府、皆病を復けて榮衛行らざる。五藏通せざれば則ち死す。是。

これ兩感で六日は七日に少陽の病者へ。頭痛少く

八日に少陽の病者へ。身熱少く愈ゆ。

九日に少陽の病者へ。耳聾す。微かに聞ゆ。

十日に少陰の病者へ。腹(臍)の如く。則ち飲食せんと

二十一、二

是。

十一日に少陰の病者へ。渴の止み滿さるも、舌が乾きこぼる。嘔す。

十二日に少陰の病者へ。囊縮み、少腹微かに下る。

大氣皆去る。病日にこぼる。是。

帝曰く、これ(兩感)なる者。と治すは奈何。岐伯曰く、これ治すは各々より藏腑を通せ。病日に愈えこぼる。是。

これ未だ三日に滿たざれば、即ちこぼる可し。さし三日に滿つれば、即ちこぼる可し。

帝曰く、熱病に愈ふ(時)に遺す所有るは何ぞや。岐伯曰く、遺す者は、愈むるに強り。即ち

遺る所存る也。此の若き者は皆病己にいと衰小るも熱
藏す所存る。この穀氣と相ひ薄り、兩熱相ひ合ふに因り
以て遺る所存る也。

帝曰く善しと。遺るを治すは奈何。岐伯曰く、この虚寒と
視るの逆從と調へば、己へ使ふ可し。

帝曰く、熱病は當に何を禁ずべきや。岐伯曰く、病熱少く
愈ゆるに肉を食へ之には、則ち復す。多く食へば則ち
遺る。此れその禁なり。

帝曰く、この病人を寒に兩感するは、この脈とその病形と
應ずるに何如。岐伯曰く、寒に兩感するは、病一日に

三十一、五

巨陽と少陰と俱に病み、則ち頭痛し、口乾き、煩満す。

二日に之と則ち陽明と太陰と俱に病み、則ち腹満身熱し、
食を食てば之に譫言なり。

三日に之と少陽と厥陰と俱に病み、則ち耳聾し、囊縮み、
厥し、水漿を入らず。人を知るは、六日に之と死す。

帝曰く、五藏已に傷らば、六府は通せず、榮衛も行はず、
是の如く、後三日に之と死に及ぶは何ぞ也。岐伯曰く、陽明は
十二經脈の長なり。この血氣は盛んなり。故に人を知るは、
三日に之と死す、氣盡くるに及ぶは、故に死す也。

凡そ陽寒を病人が温を成る者は、夏至日に及んずる者は、

温と病ふと念為し。夏至日に後了る。若は若を病ふと念為す。
若は若に皆出するべし。止むる分れ。

三十一・七